

宿命論と人生の意味

——『ジョジョの奇妙な冒険』第五部エピソードの解釈——

山口尚

本稿は、『ジョジョの奇妙な冒険』のある場面の解釈を通じて、「運命」と「人生の意味」の関係を考察する。はたして、私たちの行為がすべて「運命」によって決定されている場合に、人生は意味をもちうるのか——この問いへ回答することを目指す。

本稿の議論は以下の順序で進む。はじめに、『ジョジョの奇妙な冒険』（以下『ジョジョ』と表記）に関する手短な解説を与え、本稿で論じたい場面（いわゆる「ローリングストーンズ」が登場するエピソード）を紹介する（第1節）。次に、「宿命論」⁽¹⁾と人生の意味の間の一般的関係——宿命論が正しければ私たちの人生は無意味なものになるとしばしば考えられる点——を確認する（第2節）。つづけて『ジョジョ』で描かれる世界が宿命論的であることを具体的な「テキスト」に即して指摘する（第3節）。そして——この節で本稿における哲学的道具立てが準備されるのだが——ネーゲルの論文「人生の無意味さ」の議論を参考にしながら《宿命論がいか¹かにして人生から意味を奪うのか》を再考する（第4節）。この考察を踏まえて、最後に、宿命論的な世界観を前提する『ジョジョ』がいか¹かにして読者に《人生には何か意味があるにちがいない》という希望を与え¹うるのかを確認したい（第5節）。

1. 『ジョジョ』について——概説および「第五部エピソード」

本稿の可能的読者の大半は『ジョジョ』についてよく知っていると思われるので、手短な紹介にとどめたい。

漫画家・荒木飛呂彦の代表作『ジョジョ』は、一方で多彩な分野における商業的成功の実績を重ねつつ、他方で近年においては学術的観点からの関心を集めている。このふたつの点に共通する理由としては例えば本作で用いられる様々な表現様式の独特さが挙げられる。ときに「ゴシック」ときに「マニエリスティック」と形容される筆致や物語の背景にある「神学的な」世界観は『ジョジョ』を唯一的で無比的なものたらしめている。

おそらく学術論文において漫画を取り上げることへは相当の正当化が必要であろう。とはいえ本稿では『ジョジョ』が学問的考察の対象になるにふさわしいとすでに認められた作品であると前提して話を進めたい。他方で、宿命論と人生の意味の関係を考察する哲学



図1

論考において『ジョジョ』を取り上げる点についてはしっかり説明しておきたい。はたしてこの文脈で本作を取り上げる必然性はあるのか。私の答えは「限定的に、ある」である。一方で、絶対に『ジョジョ』でなければならない、ということはない。宿命論的な世界観を背景に備える小説・映画・漫画であれば、それに言及して本稿の主張を提示することができる（例えば『ターミネーター』シリーズでも可能である）。他方で、『ジョジョ』の考察を通じて、目下の主題の深い次元へ肉迫することができる。その理由のひとつは——すぐ後で述べるように——宿命論と人生の意味をめぐる問いが『ジョジョ』においてほぼ明示的に提示されている点である。さっそく見てみよう。

周知のとおり『ジョジョ』の物語は複数の部から構成される（各部ごとに時代と舞台と主人公が異なる）。他方で——これもよく知られているが——第五部のエピローグにおいて解釈の難しい物語が展開する。この場面で「運命」をめぐる問いが前景へ躍り出る。

第五部のストーリーは次である。ジョルノやブチャラティをメンバーとするギャング・チームは組織のボスと対立し、イタリアを舞台に文字通りの死闘を演じる。ジョルノたちは、数々の犠牲を払いながら（重要な点だが、ボスとの闘いでチームリーダーのブチャラティは死ぬ）、数々の苦難を乗り越え、最終的にボスを「終わらせる」。ボスに対する勝利という大団円の後で、以下の奇妙なエピローグが続く。

エピローグで展開する物語は、チームがボスと対立するよりはるか以前の話（ジョルノがチームへ入るより前の話）である。この物語においてブチャラティたちは、特殊な予知能力をもつ男スコリッピと接触する——実際にスコリッピと対面するのはミスタひとりだが。スコリッピの能力（の一部）は《近いうちに死ぬ人間の、その死の姿どおりに、石を彫刻する》というもの（この能力は「ローリングストーンズ」と呼ばれる）。ミスタがこの男のもとへ訪れるのに呼応して、彼の能力が発動し、ブチャラティの死を予言する石の彫刻ができあがる（図1）。

重要な点をふたつ確認しておく。(1) ブチャラティは実際に予言されたとおりに死ぬ（しばらく後のボスとの闘いにおいて）。それゆえ、石の予言は真である。(2) スコリッピは彼の能力がブチャラティの死を引き起こしたと考えていない。そして彼のこの理解はおそら

く正しい。むしろ、ブチャラティの死は運命としてあらかじめ定まっておき、スコリッピの能力はこの運命をそのまま石に彫り出すものである（彼は「この「石」は僕の心とは無関係に動く／子供の時からずっとそうだった／自分ではどうしようもない「^{パワー}力」なんだ」と言う）。

このエピローグは読者を困惑させる。というのもそれは、「本編」においてブチャラティがボスとの激闘において死ぬことを見た読者に、実はその死がずっと以前に定まっていたことを教えるからである。なぜわざわざこのようなことが語られる必要があるのか。このエピローグはブチャラティの死と生の価値を引き下げのではないか。なぜなら、ブチャラティは自らの意志と努力によって自分の生と死を選びとったかのように思われたが、実際には——このエピローグの語るところによれば——彼の死は自らのコントロールを超えた運命によってあらかじめ定められていたからである。なぜ作者・荒木飛呂彦は長い物語の果てに登場人物の努力の価値へ疑いを抱かせるようなエピソードを挿し入れたのか。

もちろん作者にブチャラティの生と死を愚弄する意図はない（はずである）。むしろこのエピローグでは『ジョジョ』の（第五部で明確な形をとった⁽²⁾）世界観が引き起こす哲学的問いへ答えることが意図されている。実際、第五部の終局部に際して、作者は語る。

[...] この世には連続するどうすることもできない「運命」というものが存在することを認めざるを得ない。しかし一方で「運命」で決定されているとなると、努力したり喜んでも仕方がないという考えも生まれてくる。[...] 答えはあるのか?⁽³⁾

関心を惹く問いは次である。はたしてエピローグはこの問題へどのような解決を与えているのか。運命の存在から生じる無力感へどう対峙すべきか。この問いに対するエピローグの回答が何であるかは、今のところ定説がない（ウェブ上でいくつかの解釈が提案されているが）。本稿の目標のひとつは、私が妥当と考える解釈を提示することである。

2. 宿命論と人生の意味

第五部エピローグにおける「運命の問題」は、伝統的な哲学的問題——宿命論と人生の意味の問題——に類すると思われる。それゆえ本節では、哲学的な寄り道をして、この問題の内実を確認する。

この問題は《宿命論は人生の意味を否定するかもしれない》と表現できる（次節で、第五部エピローグにおける「運命の問題」を、この問題の具体的ケースと解釈する）。以下では「宿命論」および「人生の意味」の内容とそれらの間の緊張関係を確認したい。

まずは宿命論について。

「宿命 (fate)」および「宿命論 (fatalism)」に関する議論はかなり古くから存在する⁽⁴⁾。他方で、この問題に関心のあるひとは知っているように、現代の英語圏の哲学でも、刷新された仕方で宿命論が論じられている⁽⁵⁾。宿命論は最も抽象的には《生じることはすべて必然的に生じる》というテーゼで特徴づけられるが(Bernstein 1992, p. 5)、その論拠と含意に従っていくつかのタイプが区別される。例えば、論拠を基準にして、しばしば三つのタイプが分けられる。

「論理的宿命論 (logical fatalism)」は、論理的な前提のみにもとづいて、宿命論のテーゼを主張する。この場合、テーゼにおける「必然的に」は論理的必然性と解釈される⁽⁶⁾。

「形而上学的宿命論 (metaphysical fatalism)」は、世界に関する形而上学的な前提 (および論理法則) にもとづいて、宿命論のテーゼを主張する⁽⁷⁾。例えば、私たちの世界では充足理由律が成立するという前提にもとづき、一切の必然性を主張する立場がこれである。

「神学的宿命論 (theological fatalism)」は、神の諸属性・諸特性にもとづいて、宿命論のテーゼを主張する。例えば、《神が一切をあらかじめ知っていること》や《神が恣意的でない仕方で世界を創造したこと》にもとづき、一切の (ある意味の) 必然性を主張する立場がこれである。

「宿命論」の解釈としてどれがベストか——これについては紙幅の都合上論じない。他方で——次節で主張するが——『ジョジョ』の世界観が前提する宿命論は「形而上学的」ヴァージョンに属する (ある点で「神学的」ヴァージョンにも似ているが)。

他方で宿命論はその含意に関しても区別される (詳細は省くが)。本稿は次の含意をもつ形而上学的宿命論に注目する。それは、(宿命論が正しければ) 私たちは未来の出来事を引き起こしたり引き起こさなかつたりする能力をもたない、という含意である。これは《私たちが何を行なおうとも、起こるべきことが起こる》⁽⁸⁾を理解されてはならない。一般に、形而上学的宿命論はこうしたことを帰結しない⁽⁹⁾。むしろ以下のように理解されるべきである。宿命論が正しければ、未来の出来事もすでに決定されていることになる⁽¹⁰⁾。そして私たちは、過去のすでに決定されている出来事を変えることができないのと同様に、未来のすでに決定されている出来事を変えることもできない。——もし宿命論がこうした含意をもつならば、それは数々の実践概念を脅威にさらす。

次に人生の意味についてである。

人生に意味はあるのか——この問いは哲学の内外で提起されうる。この問いは複数の解釈をもつ (私の人生について語っているのか、人間一般の生について語っているのか、など)。また、ここでの「意味」の意味も問題になる。とはいえ本稿ではこうした解釈問題を

避け、必要な点を約定することと定める。本稿は「創造性 (creativity)」としての人生の意味へ焦点を絞る⁽¹⁾。

私たちは決められたルールにのる人生をしばしば無意味と見なす。あるいは、ルーティン化された作業だけを繰り返す生活を無意味と感じるときがある。なぜか。その理由は重要な意味の新しさがこうした生に欠けていることである。少なからぬひとは、それまでになかった何かを新たに生み出した人生こそを、有意味な生と考える（とりわけ学者や芸術家にこのタイプのひとがいる）。

なぜ創造性はときに人生の意味の条件となるのか。この点は明快な説明が難しい。おそらく《自分の人生が「無」であることを避けるために、人生を通じて世界の存在全体へ何かを付け加えたりそれに変化を与えたりしたい》という欲求が関連していると思われる。もちろん「意味」には他の意味もある。とはいえ少なくとも創造性という意味での「人生の意味」が語られうることは確かである。そして——すぐ後で見ると——宿命論が予先を向ける人生の意味は、この意味のそれである。

最後に、宿命論と（本稿の意味での）人生の意味の間の緊張関係を確認しよう。

この緊張関係は直感的には以下のように表現できる。先に述べたように、宿命論が正しければ、未来の出来事はすでに、例えば私たちが生まれるずっと前に、決定されていることになる。それゆえ宿命論のもとでは私たちは、すでに決められた事柄を「こなす」だけの存在になる。私たちの努力は創造性へ寄与しない。かくして、「意味」が創造性を意味する場合には、宿命論は私たちの人生から意味を奪う。

ポイントは以下である。宿命論が正しければ、存在または実在の全体（未来の出来事も含む）は私たちの誕生以前にその内実を細部まで確定している。それゆえ私たち自身が存在全体の総量を増加させたりその内容を変化させたりする余地がない。この意味で、私たちは無力であり、「努力したり喜んでも仕方がない」。

以上が宿命論と人生の意味の緊張関係である。さて次節では、『ジョジョ』の世界観があるタイプの「形而上学的な」宿命論を前提している、と解釈しうる点を指摘したい。もしこの解釈が正しければ、『ジョジョ』は宿命論と人生の意味の問題を引き受けることになる。

3. 予知と宿命論——『ジョジョ』における「運命」のひとつの解釈

『ジョジョ』の世界が宿命論的である点は、本作にしばしば予知や予言を行なう能力をもつ者が登場することからサポートできる。本節では、まずこうした能力を具体的に確認し、その後で『ジョジョ』における「運命」が宿命——すなわち未来の出来事を含む万物の必然性——を意味すると解釈されうる点を指摘する。

『ジョジョ』第三部に登場するボインゴは未来の出来事を漫画で予言する（図2）。彼自身が「一度印刷に出た予言はもう決して変えることができないッ！／決して！」と述べるように、予言は（彼の漫画で表象された範囲で）必ず当たる。もちろん——この点は解釈に際して重要だが——ボインゴの能力が実際に何を行なっているかについては議論の余地がある。例えば《ボインゴの能力自体が未来の一定の側面を決定している》という見方は



図2

ありうる。とはいえ、自然な読みに従えば、次のように言えそうである。すなわち、『ジョジョ』の世界では未来の出来事の少なくとも一側面は前もって決定されており、ボインゴの漫画はこの側面を正しく予言する、と。

五部に登場するディアボロはより精度の高い予知能力をもつ。彼は10秒先の未来の状態が「見える」（図3）。そして、ここで見られたことは必ず実現する。ディアボロの能力についてもそれが実際に何をしているかに関して議論の余地がある。とはいえ——ここでも自然な解釈をすれば——彼の能力は、未来を作るものではなく、観察するものだと



図3

言えそうである。加えて、ディアボロが見る未来の正確さに鑑みると、次の点も指摘できる。『ジョジョ』の世界では未来は（ボインゴのケースで想定されるより）細部まであらかじめ決定されている、と。

私見だが、『ジョジョ』において「運命」が語られることになった一因に、こうした予知能力者の存在があるのではないだろうか⁽¹²⁾。というのも、すでに暗に触れたように、予知の可能性は未来の先行決定を含意するからである。別様に言えば、ボインゴやディアボロが存在する世界は、未来に避け得ない「運命」が存在する世界である。

さて、何度も述べたように『ジョジョ』の「運命」が何を意味するかに関しては解釈の余地があるが⁽¹³⁾、本稿では以下の理由からそれを「宿命論的に」と解釈したい。すなわち、『ジョジョ』の世界ではすべての出来事は必然的であり、未来の出来事は完全に細部まで先行決定されている、と解したい。

第一の理由は以下である。すぐ上で述べたように、予知は少なくとも部分的な先行決定を含意する。他方で、《世界が部分的にのみ先行決定されている》という存在論は次の理由

からディアボロの能力と折り合いが悪い。一方でこの存在論においては、未来における事柄のいくつかは予言不可能である。他方でディアボロは——自らの意志で能力を発動させる点に鑑みると——原理的に任意の未来の出来事を予知しうると思われる。それゆえ、『ジョジョ』においては、予知の可能性が未来の全面的な先行決定を帰結すると言える。

第二に——第1節で引用したが——作者が言うように「運命」が「努力したり喜んで仕方がないという考え」を生むためには、「運命」は未来の部分的先行決定のみを意味できない。なぜなら、『世界が部分的にのみ先行決定されている』という存在論においては、例えば「たとえ結果が決まっているとしても、その結果へ至る過程を努力によって選ぶことができる」などと主張して、努力の価値を肯定できるからである。むしろ、「運命」が全面的な先行決定を意味する場合にこそ、「運命」と人生の意味の問題は生じる。それゆえ、作者の意図に沿うならば、『ジョジョ』の「運命」は宿命と解される方がよい。

以上の解釈が正しければ、『ジョジョ』は前節で定式化した「宿命論と人生の意味の問題」に直面することになる。はたして宿命論的な世界において人生は意味をもちうるのか。そして——この点には多分に私の「読み」が混入しているが——第五部エピローグはこの哲学的問題へ解決を与えるために描かれた。

4. 宿命論が人生から意味を奪うダイナミクス——ネーゲル流の分析

ではエピローグが提示する答えは何か——この点は5節で論じる。本節ではその準備として、まず目下の問題の難しさを指摘し、その後でネーゲルの議論を参照して「解決」の糸口をさぐる。

宿命論と人生の意味の問題を「嬉しい」仕方で解決することは困難である。すなわち、宿命論を前提したうえで、(本稿の意味での)人生の意味の存在を救うことはきわめて難しい。私は、率直に言えば、不可能だと思う。実際、宿命論が正しければ、未来の出来事を含むすべての事柄は私たちが存在する以前に決定されている。このことは私たちの現在の行為が創造性をもたないことを含意する。たしかに「たとえすべてがあらかじめ決定されていたとしても、私たちの人生には何か意味があるはずだ」と応じることはできる。しかし、この場合、おそらく「意味」の意味が変わってしまっている。もし「意味」で創造性を意味するならば、宿命論は論理的に人生から意味を奪う。

このように宿命論のもとでは人生に意味はない。とはいえ——ここが重要であるが——この点で話を終わらせる必要はない。人生の意味に関しては、話へさらなる「ひねり」を加えることができる。このことは Nagel(1971) に依拠して主張できる。

ネーゲルの議論はすでに山口(2011)で詳細に紹介したので、本節では手短かにそれを「宿

命論と人生の意味」の文脈で語りなおしてみる。ネーゲル流の分析に従えば、宿命論が人生から意味を奪うダイナミクスは「ふたつの視点」なるものを通じて記述できる。

私たちは、普段は、自分の人生を「非反省的に」生きている。すなわち私たちは、自分が未来に新しい何かを創造したり体験したりすることを漠然と信じながら、活気ある生活に充実感を覚えたり決まりきった生活にうんざりしたりする。こうした「日常的」視点においては、ある事柄が有意味と見なされたり別の事柄が無意味と見なされたりするが、人生全体に関して「それは無意味だ」と主張されることはない。この「普段の」視点においては、ひとは人生が意味をもちうると（暗に）信じている。

しかし私たちはときに自分の生活から「一步退いて」、人生と世界の全体を客観的に眺めることがある——この際、世界が宿命論的であることに気づかれるときがある。そして、こうした「一步退いた」視点から見える世界と人生に、有意味性の日常的基準——創造的な活動こそが有意味だ——を適用するとき、人生の無意味さが発見される。宿命論的な世界においては、存在全体を客観的に眺める「反省的」視点という（おそらく一定の存在者しかもちえない）高度な能力が、人生の無意味さを暴露してしまう。

以上が《宿命論がいかにして人生から意味を奪うのか》に関するネーゲル流の説明である。要点は以下の二点。(1) いわば「人生を直接的に生きる視点」（以下、抽象的に「内的視点」と呼ぶ）においては、私たちは人生が意味をもちうると信じている。(2) 人生を客観的に見る視点（以下、抽象的に「外的視点」と呼ぶ）においては、世界や人生全体のあり方を考慮したうえで人生の意味が吟味される。そして、世界の宿命論の様相が気づかれるとき、人生は完全に無意味に思われてくる。

ネーゲルはこうした「ふたつの視点」について重要な点を指摘する。それは、これらの視点は人生の意味に関して相反する見え方を供給するが——内的視点は人生を意味あるものに見せるが、外的視点は人生を無意味に見せる——私たちはどちらの視点も捨て去ることができない、という点である⁽¹⁴⁾。それゆえ私たちは《一方で人生に意味を認めながら、他方で意味を否定する》という逆理的な状態に立つことになる。ネーゲルはこうした状態をカミュに倣って「不条理 (absurd)」と呼んだ(Nagel, 1979, p.13)。

ネーゲルの分析の是非に関しては議論がないわけではない。とはいえネーゲルの分析は、人生の意味をめぐる私たちの「はっきりしない」態度をうまく説明しているように感じられる⁽¹⁵⁾。それゆえ私はネーゲルの枠組み——「ふたつの視点」による分析——を以下において採用する。とりわけネーゲルの分析で指摘される次の点に着目したい。それは、たとえ私たちがひとたび外的視点に立って人生の無意味さに気づいてしまった後でも、私たちは内的視点から完全に離れてしまうわけではない、という点である。私はこの点に、宿命

論的世界において限定的に人生の意味を取り戻すことへのヒントがあると考え。——この点は次節で説明しよう。

5. 人生の意味の限定的奪還——第五部エピローグの一解釈

本稿の問いは次であった。『ジョジョ』の第五部エピローグは「運命の問題」へどのような解決を与えているのか。例えば——第1節で述べたように——ブチャラティの死は運命によってあらかじめ決定されていた。そうであれば私たちはいかにしてブチャラティの努力に意味を見出さうのか。とりわけ、もし『ジョジョ』の「運命」は宿命を意味するという私の解釈が正しければ、いかにして「努力したり喜んでも仕方がないという考え」から逃れられるのか。

答えはおそらく以下である。外的視点に立って宿命論的な世界のあり方を考慮に入れる限り、ブチャラティの生には何の意味もない。この意味で、『ジョジョ』の世界において彼の生は「客観的には」無意味だ、と言える。とはいえブチャラティの生（あるいは生き様）には——興味深いことに——それを見る者を内的視点へ引き戻す効果がある。『ジョジョ』の読者はブチャラティの生き方を見る際、「本当のところすべては前もって決定されており、彼の生は無に等しい」という事実を正しく捉える視点から引き離され、「それでも彼の生には何か意味があるのかもしれない」と考えてしまう視点へ連れ戻される。もちろん後者の視点が見せるものは幻想である（というのも——直前で述べたように——ブチャラティの生は客観的には無意味なので）。とはいえ、それでも、ブチャラティの生き方が《人生には何か意味があるのかも》という希望を与えよう点は否定できない。

内的視点への引き戻し——なぜこのようなことが生じるのか。この点を明快に説明することは現在の私にはできないが、いくつかの重要な事柄を指摘することはできる。第一に、前段落の叙述は『ジョジョ』の内容と照らして少なくとも外的外れでない。第二に、前段落のような仕方の「宿命論と人生の意味の問題」の解決は、哲学の論文には行なうことができない。言い換えれば哲学の論文は、構造上、読者に人生の意味への希望を与えることはできず、この仕事をうまくこなすのは漫画（あるいは小説や映画あるいは宗教など）である。以下、この二点を論じよう。

第一に、《宿命論を信じる者さえも内的視点へ引き戻して、人生の意味への希望を与える》という解決——いわば人生の意味の限定的な奪還——を第五部エピローグが与えているという読みは牽強附会ではない。なぜならスコリッピ自身がこの仕方で人生の意味への希望を得ているからである——それはきわめてかすかな希望であろうが——。説明すれば以下である。



図 4

スコリッピは、自分の予言能力のために、宿命論的な世界観をもつ。そして——本稿の言葉をもちいれば——各々のひとの人生に創造性や意味を認めず、《運命は受け入れた方が楽である》という消極的な人生観をもつ。この点でスコリッピは、次のような哲学的人物を象徴するようなキャラクターである。すなわち、宿命論と人生の意味の問題にとり組んだ結果、宿命論的世界においては不可避免的に人生が無意味になることに気づき、人生に絶望する人物、である。しかしながら彼は、ブチャラティの運命を変えようとして決死の賭けに出るミスタの行動を見て、「人生には何か意味があるのかもしれない」という考えへ傾く。もちろんスコリッピは運命が変えられるかもしれないなどとは思わない。彼は——私の解釈では——根っからの宿命論者である。しかしながら彼でさえ、

ミスタの必死の努力を見て、「人生には何か意味があるのかも」と考えてしまう（図4）。

スコリッピの心境の変化は「外的視点から内的視点への引き戻し」と表現できると思う。実際、心境が変化する前のスコリッピは宿命論者として、客観的な視点から人生の意味を考察していた。彼はつねに、私たちが「運命の奴隷」であることを意識し、このもつて人生の意味を考える。他方でミスタの努力を見た後のスコリッピは少し肩の力が抜けたところがある。彼は——おそらく一時的に——宿命論への確信から離れ、《未来には何か未決のところがある》という「非反省的な」内的視点へ立ち戻る。

なぜミスタの努力はスコリッピの心境を変化させることができたのか。この点は——先も触れたように——明快に説明することができない。おそらくミスタ自身が運命に妥協しない者、言い換えれば自分の人生を自分が切り拓きうることを確信する者、であることが関連しているだろう。こうした人物の行動はしばしば「触媒効果」をもつ。すなわち、こうした人物の行動は、それを見る者のうちに似た態度を喚起する。それは《努力することによって何か意味があることを行なえるかもしれない》という希望と確信である。このことは、見る者が宿命論者だとしても成り立つ。宿命論者も、妥協せずに生きる人間の生き様を見る際には、少なくとも一時的には人生の意味への希望を取り戻す。これと似た仕方で、ブチャラティの運命を知る読者も、妥協せずに闘い抜いた彼の生き方を見る際には、そこには大きな意味があるのだと感じる。

もちろん——この点もあらためて強調するが——こうした希望は、宿命論が正しい場合

には、すべて幻想である。宿命論的世界においては、宿命論を直視して《人生は無意味だ》と考える方が真なる認識である。それゆえ、たとえミスタの努力がスコリッピに意味への希望を与えたとしても、それは限定的なものにとどまる。とはいえ——この点も重要だが——宿命論的世界においては意味への希望は不可避免的に「幻想的」なものになる（逆から言えば、^{トゥル}真なる希望は存在しない）。そして、この点に鑑みれば、ミスタがスコリッピへ与えた希望は、たとえ幻想であっても、「^{ジェネユイシ}本^ノ当^ノ」希望であると言える。

最後に、第二の点——読者へ人生の意味への希望を与える、という仕事は漫画（あるいはその他の芸術表現や宗教表現）こそがうまく果たす——を手短かに説明しよう。

一方で哲学の論述は、その表現様式の制約のために、読者や聞き手へ目下の希望を与えるのが苦手である。原因は哲学的思考が物事を「客観的な」視点で捉えようとする点にある。この視点をとる限り、例えば、宿命論のもとでは人生の意味を救うことは不可能になる。なぜなら、この視点をとる限り、「宿命論的世界では人生に意味はない」という真理を直視しないわけにはいかないからである。この意味で、哲学の論文や著書は、構造上、読者へ人生の意味への希望を与えることができない⁽¹⁶⁾。

しかし漫画にはそれができる。というのも——明示的に言ってしまえば月並みだが——漫画には、運命に妥協せず努力を続ける具体的なキャラクターが登場しうるからである。おそらく本稿の言う「内的視点への引き戻し」には具体的な人物とその行動による誘引が必要なのであろう。ブチャラティは具体的な生き方を通して読者へ希望を与える。こうした点において漫画は、人生の意味の問題に関して、哲学の論文よりも優位に立つ。

もちろん、こうした仕方でも人生の意味への希望を与えうるメディアは漫画に限らない。小説や映画でも可能であろうし、宗教や人間関係もそうした役目を果たしうる。とはいえ——本稿の議論から見てとれるように——『ジョジョ』は人生の意味の問題に関して特別なステータスをもつ。そして、この漫画をして目下の哲学的問題に関する深い示唆を含む作品たらしめているのが、ときに解釈問題を引き起こす第五部エピソードであると言える。

註

⁽¹⁾ 本稿では「運命」と「宿命」・「宿命論」を区別して用いる。「宿命論」は、現代の英語圏の哲学において 'fatalism' と呼ばれるものを指す。これは《一切の事柄はあらかじめ決定されており、私たちは自分の人生を選ぶ力をもたない》という立場である。他方で「運命」は『ジョジョ』に現れる術語である。本作ではしばしば運命が語られるが、それが正確に何を意味するかは議論の余地がある。とりわけ「運命」が宿命を意味するかは判明でない。本稿では——専断を避けるため——ふたつの言葉をさしあたり区別する。

⁽²⁾ 註 (12) を参照。

⁽³⁾ 荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』単行本 63 巻（集英社、1999 年）のカバー折り返し部における著者のことば（この巻で第五部の幕は閉じる）。

⁽⁴⁾ 名前だけ挙げれば、アリストテレスの 'future contingencies' に関する議論やキケロの著作に登場する「怠

情論証」において、宿命論が問題となる。

(5) 経緯に触れておけば、まず出発点は形而上学者リチャード・テイラーの論考(Taylor, 1962)である。彼はここで、いくつかの前提から《もし私たちが過去の出来事を引き起こしたり引き起こさなかったりする能力をもたないとすれば、同様の理由で、私たちは未来の出来事を引き起こしたり引き起こさなかったりする能力をもたない》ということが帰結する、と論じた。この議論には多くのひとが反対する。もっぱら雑誌 *Philosophical Review* と *Analysis* において、テイラー対その他の論戦が展開した。テイラー以後には、カーンやバーンスタインが新たな論点を供給している(Cahn, 1967; Bernstein, 1992)。ちなみにテイラーは宿命論者ではない(cf. Cahn, 2011, p.38)。彼は先の議論の前提のどれかが偽だと考えていた。他方でカーンとバーンスタインは宿命論者である。——テイラーの論文やその反論は Wallace(2011) に収められている。

(6) Cahn(1967) は《宿命論は、一般的に、まさしく論理的宿命論的なものだ》と考える。

(7) Bernstein(1992, chap. 1) は、宿命論のテーゼにおける「必然的に」を論理的必然性と解釈するのは強すぎるとして(この場合、現実世界が唯一の可能世界になる!)、宿命論の形而上学的解釈を好む。

(8) 例えば、私がこの病気で死ぬならば、「私が医者に行こうが行くまいが、私は死ぬ」などのように(鍵括弧内は偽でありうる)。

(9) 論理的宿命論はこれを帰結するかもしれない——と考えるひとがいる(これはひとつの争点である)。

(10) この点はいくつかの仕方でも正当化できる。直接的には《宿命論のもとでは、未来の出来事も必然的になる》という点が論拠になる。

(11) 人生の意味は多様に語られる。例えば目的としての意味もあれば価値としての意味もある。それゆえ、どの文脈でどの意味の「意味」が語られているかを区別することは重要である。「創造性」としての意味は例えば Taylor(1987)で論じられる。

(12) とりわけディアボロの精度の高い予知は、宿命論的世界観と相性がよい(この意味で『ジョジョ』の宿命論的世界観は第五部において明確化されたと言えそうである)。

(13) 重要な論点は、「運命」において未来がどのくらい細部まで先行決定されているのか、である。

(14) この点は山口(2011, pp. 87-88)で詳しく紹介した。

(15) それゆえ、「人生の意味」を論じる邦語文献のうちの哲学的秀作(例えば佐藤(2012)や船木(2008)など)がネーゲルの議論を綿密に論じていないのは残念である。

(16) この点は一般化できると思われる。「宿命論と人生の意味」の問題を離れて、おそらく、人生の意味一般に関して、「論述的な」形式の思考はその存在を救うのが苦手である。それゆえ船木(2008)が、論理的に考えると人生には意味がないように思えてくる、と主張するのは自然である。他方で、佐藤(2012)が哲学書を通じて人生の意味を救おうとしている点については、私はその努力を認めつつも「いささか苦しいのでは」という感想をもつ。「人生には本当のところ意味はあるのだろうか」と哲学的に問うたときに、かえって人生の意味は見出せなくなる——こうした側面が人生の意味にはあると思われる。

文献

Bernstein, M. (1992), *Fatalism*, Lincoln, London: University of Nebraska Press.

Cahn, S. (1967), *Fate, Logic, and Time*, Atascadero, California: Ridgeview Publishing Company.

—— (2011), 'Introduction to Part 1 of *Fate, Time, and Language*', in D. Wallace, *Fate, Logic, and Language*, ed. by S. Cahn and M. Eckert, New York: Columbia University Press.

船木英哲 (2008), 『人間の生の無意味さはいかに語られるか』, 東洋出版.

Nagel, T. (1971), 'The Absurd', *Journal of Philosophy*, 66, reprinted in his *Mortal Questions* (1979, pp. 11-23), Cambridge: Cambridge University Press

佐藤透 (2012), 『人生の意味の哲学——時と意味の探求』, 春秋社.

Taylor, R. (1962), 'Fatalism', *The Philosophical Review*, 69, pp. 56-66.

Taylor, R. (1987), 'Time and Life's Meaning', *The Review of Metaphysics*, 40, pp. 675-686.

Wallace, D. (2011), *Fate, Logic, and Language*, ed. by S. Cahn and M. Eckert, New York: Columbia University Press.

山口尚 (2011), 「神の命令倫理学の利点——ネーゲルとノージックの「人生の意味」論に依拠して」, 『宗教と倫理』, 第 11 号, 81-95 頁.

[大阪工業大学・哲学]